

長崎大学 A0 入試における書類選考データの分析

—選抜への寄与と評価の信頼性の観点から—

吉村 宰 (長崎大学 アドミッションセンター)

選抜への寄与と評価の信頼性の観点から A0 入試における書類選考データの分析を行った。長崎大学 A0 入試では第 1 次選考として書類選考が行われる。受験生が提出する書類のうち「自己推薦書」に焦点をあてその評価の信頼性と第 1 次選考での選抜への寄与の程度をそれぞれ確認した。「自己推薦書」の評価の信頼性は概ね高いものであるが、評価の基準が十分に明確でない場合に信頼性が低下する傾向が確認された。共分散比に基づく「自己推薦書」の選抜への寄与の程度は配点比と大きく異なることもあり採点手続等に工夫が必要であることが示唆された。

1. はじめに

長崎大学は昨年度で 5 回目の A0 入試の実施を終えた。長崎大学 A0 入試は「学力検査のみでは測れない入学希望者の意欲、関心、適性、基礎学力、将来性等を、詳細な書類選考と時間をかけたいねいな面接等の組み合わせによって、多面的、総合的に評価して合格者を決める選抜方法」として位置づけられ、具体的には提出書類の審査を行う第 1 次選考と面接や課題論文などを課す第 2 次選考の 2 段階で入学者選抜を行っている¹⁾。

大学が求める入学希望者の特性を測定・把握するために、志望理由書や自己推薦書などの提出書類の審査や面接を A0 入試で採用している大学は多い。また、各大学における入学者選抜方法の改善に関する取り組みの中には A0 入試全体としての選抜方法の妥当性を検証する試みも少なくない。書類審査や面接という選抜方法は A0 入試の目的を果たすために一定程度機能すると評価されているようである。入学者選抜方法のさらなる改善のために次に必要なのは、特定の書類審査方法や面接方法がどのよう

な性質を持つのか、どのようなことが起きているのかをデータに基づいて詳細に検討することである。そしてその結果を踏まえ書類審査や面接の具体的な手続きを洗練させることである。

本報告は、A0 入試における書類選考データを分析することでその方法の改善のための情報を得ようとする一つの試みである。

2. 平成 18 年度長崎大学 A0 入試の概要

2.1 平成 18 年度実施状況

平成 18 年度長崎大学 A0 入試は全 8 学部 15 学科 (課程) で実施された。募集人員は 90 名であり全募集人員 1636 名の約 5.5% である。志願者数は全体で 456 名 (志願倍率 5.1 倍) であった。表 1 に平成 18 年度の実施状況、表 2 に募集人員の平成 14 年度第 1 回目の実施からの推移を示した。

表 1 平成 18 年度長崎大学 A0 入試実施状況

	募集人員	志願者数	志願倍率	1次選考合格者	合格者
教育学部	16	103	6.4	40	20
経済学部	5	35	7.0	10	5
医学部	10	133	13.3	50	10
歯学部	15	25	1.7	25	9
薬学部	4	17	4.3	12	4
工学部	31	90	2.9	58	36
環境科学部	4	27	6.8	13	4
水産学部	5	26	5.2	15	5
計	90	456	5.1	223	93

表2 AO入試募集人員の推移

	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
全募集人員	1641	1636	1636	1636	1636
AO入試定員	15	70	74	84	90
全定員に対する比率 (%)	0.9	4.3	4.5	5.1	5.5
志願者数	156	503	447	465	456
志願倍率	10.4	7.2	6.0	5.5	5.1

2.2 選抜方法

どの学科(課程)も第1次選考,第2次選考の2段階選抜を行った。第1次選考は書類選考であり,出願時に提出される「自己推薦書」,「諸活動の記録」²⁾,調査書等に基づく審査が行われる。第2次選考では課題論文(あるいは総合問題,課題作文,課題作成),面接が行われる。第2次選考で小テストを課す学科等もある。また,医学部,歯学部,薬学部では第2次選考でセンター試験の成績が選考資料に加えられる。

出願時期は学部によって異なり,9月上旬(教,経,環,水),9月下旬(工,歯),11月下旬(医,薬)である。第1次選考は出願締切後に直ちに開始される。選考期間はおよそ一週間である。

3. 書類選考データ

3.1 提出書類

「自己推薦書」「諸活動の記録」にはそれぞれ「共通様式」と呼ばれる書類様式が2種類ずつある。「自己推薦書」には志望理由(様式I)と自己アピール(様式II)を,「諸活動の記録」には文化・スポーツ・生徒会等の活動(様式III)と資格・検定・段位(様式IV)をそれぞれ記す。この他に学部独自の様式(「学部様式」と呼ばれる)で上記と類似した内容を記した書類の提出を求める学部もある。出願者は共通様式のうち出願先の学部が指定するもの,及び学部様式(もしあれば)を提出する。提出すべき書類の数は出願先によって異なり,少ない学部で2種類,多い学部では5種類である。志望理由及び自己アピール

に関する書類はすべての学部で提出を求めている。

3.2 分析データ

書類選考はアドミッションセンター教員14名(専任3名,兼務11名)のうちの複数名(半数以上)及び各学部学科からの選考委員(3名~6名程度)で行われる。各学部学科等において採点者は提出された書類をすべて読みそれぞれ採点を行う。各採点者の評点が全体で総合され受験生の第1次選考の成績となる。なお,書類選考における配点,採点基準等については現時点では公開していない。

提出書類の種類は学部学科等でそれぞれ異

表3 自己推薦書採点データの形式

受験者	採点者A	採点者B	...	採点者X
1001	3	2		5
1002	5	6		4
1003	9	8		7
.
.	.	.		.
.	.	.		.
1100	8	6		2

なるが,「自己推薦書」は全学部学科等で提出される。本報告で書類選考データとして取り上げ分析の対象とするのは,この「自己推薦書」の採点データであり,表3に示した形式で得られる。

4. 分析結果

4.1 分析の考え方

各採点者をテスト項目とみなすと,例えば採点者が10名の書類審査は10個の項目で構成される1つのテストであると考えられることができる。このような考えのもと書類選考のテストとしての性質や特徴,また項目としての採点者の性質や特徴を探ることとする。

4.2 共分散比に基づく「自己推薦書」の選抜への貢献度

表4 「自己推薦書」の総合点に対する共分散比

学部学科等	採点者数	共分散比 (%)	配点比との比較
A	7	51.1	<
B	7	36.3	<<
C	11	7.1	<<<
D	7	35.3	<<
E	7	11.1	<<
F	8	75.5	>
G	8	96.6	>>>
H	8	70.9	<
I	8	75.0	<
J	10	61.3	<
K	17	8.2	<<<

共分散比は、選抜が科目 X, Y, Z の総合点に基づいて行われるとき、「科目と総合点の共分散/総合点の分散」として定義され(竹内, 1986), 各科目の選抜への寄与の程度を表す指標とし入試データの分析で利用されることが多い(椎名・柳井他 1997; 山田・山村, 1997)。

「自己推薦書」の総合点に対する共分散比及びその配点比との大小関係を表4に示した。表中の不等号は共分散比と配点比との大小関係及びその差の大きさを表し、「<」は配点との差が10ポイント未満、「<<」は10ポイント以上20ポイント未満、「<<<」はそれ以上であることを示している。なお、志願者が10名以下の学部学科等については分析結果を掲載していない(以下同様)。

表中、募集単位 C, K では共分散比が小さく配点比とのズレが大きい。「自己推薦書」の第1次選考における寄与はそれぞれ7%, 8%程度といずれも配点比より20ポイント以上小さい。通常、配点比はある選考手法・材料の選抜全体に対する重要度を反映すると考えられる。募集単位 C, K では「自己推薦書」が、配点比を決める段階で期待していたであろうほどの選抜への寄与を果たしていない。また、これらの募集単位における「自己推薦書」の採点者一人当たりの選抜に対する寄与は0.5%程度である。コストとのバランスにも目を向ける必要があると思われる。

4.3 「自己推薦書」評価の信頼性

表5は「自己推薦書」のクロンバックの α 係数(以降 α 係数と呼ぶ)である。 α 係数とは、信頼性係数(測定値の分散に占める真値の分散の割合として定義される)の推定値としてよく利用されるものであり、0から1の値をとる。測定値に占める誤差の割合が小さいほど α 係数は1に近くなる(心理測定分野では態度や特性の尺度構成時に α 係数0.8以上を目指すことが多い)。なお、 α 係数はテストを構成する項目間の相関が高いほど値が大きくなる。また通常項目数が多いほど α 係数は高くなる傾向がある。

表5に示したように、「自己推薦書」の α 係数は募集単位間でかなりのばらつきがある。 α の値が0.9前後の募集単位ではそれなりに信頼性の高い評価が行われたと言えるが、 α の値が0.6に達しないような信頼性の低い、すなわち偶然の要素が大きい評価が行われた募集単位もある。募集単位 B では「自己推薦書」の選抜への寄与が35%を超えるが、その「自己推薦書」の信頼性は十分に高いとは言えない。このことは選抜結果に偶然の要素が

表5 「自己推薦書」の α 係数

学部学科等	採点者数	α 係数
A	7	0.731
B	7	0.567
C	5	0.588
D	7	0.763
E	7	0.615
F	8	0.895
G	8	0.873
H	8	0.762
I	8	0.800
J	10	0.885
K	17	0.901

影響する程度が少なくないことを意味する。

先に述べたように採点者間の相関が高いほど(評価が似ているほど) α 係数は大きくなる。表6にはそれぞれの募集単位での採点者間の相関係数の平均値と中央値を示した。 α 係数の大きさの違いは主として採点者間の相関の違いに起因すると言えよう。

表6 採点者間の相関係数の平均値と中央値

学部学科等	相関係数の平均値	相関係数の中央値	採点者のペアの数
A	0.299	0.303	21
B	0.230	0.231	21
C	0.235	0.201	10
D	0.423	0.419	21
E	0.213	0.192	21
F	0.574	0.579	28
G	0.483	0.471	28
H	0.344	0.379	28
I	0.536	0.556	28
J	0.492	0.507	45
K	0.405	0.419	136

採点者間で評定の一致度が低い募集単位(A, B, C, E)には書類評価の観点・基準があまり明瞭でないという共通点がある。明確な評価観点・基準を設定すればこの点に改善が見られる可能性がある。

5. おわりに

書類選考データの分析の結果、書類選考の選抜への寄与度は配点比として示される事前に想定されている重みとは必ずしも一致しないことが明らかになった。この問題については採点方法を工夫することで解決できると思われるが詳細については今後の課題としたい。

また本分析結果は、書類評価の明瞭な基準があれば10名足らずの採点者である程度信頼性の高い評価を行うことができそうであることを示唆するものである。特に評価の観点と基準の設定は信頼性の高い書類選考のためには欠かせないものであることを強調したい。

「明確な基準は設定しない方が多様な人材が得られる」や「多くの人の目で見ることが大切である」などの議論がある。こうした主張はある種の「精神論」であり根拠はない。明確な基準を設定しなければ多様な人材が得られることは確かである。しかしそれは抽選で合格者を決めた場合の多様性と大差ない。また、「多くの人の目で見ると」ということが、採点者がそれぞれ無関係に独自の観点と基準で評価しそれらを「総合」する（評点を合計

したり平均したりする）ということであるならば、どのような特性や特徴の志願者を入学させたかを説明することはできない。これはアドミッションポリシーに基づく入学者選抜を行うことと矛盾する。今後は「精神論」に終始するのではなく、データに基づく検証を繰り返し、選考手法を洗練させていく必要がある。

本研究で分析の対象としたような出願時に提出される書類については「高校教員などの大人の手が入っておりその評価の分析・研究には意味がない」という声もある。

提出される書類に大人の手が入っている可能性が高いことを否定はしないが、大学がその取り扱いについての説明責任を負わなくて済むわけではないことを十分に認識しておく必要があるだろう。

なお本稿では複数の書類を「自己推薦書」としてまとめ、その得点データを分析の対象とした。個々の書類ごとのデータのさらに詳細な分析は今後の課題としたい。

注

- 1) 水産学部では第1次選考に課題論文を課している。
- 2) 工学部、環境科学部では課されない。

文献

- 椎名久美子・柳井晴夫・松岡雄治・西園昌久・佐藤淑子, 1997, 「福岡大学医学部における入試データの解析」『大学入試センター研究紀要』27:19-34.
- 竹内 啓, 1986, 「入試科目の事後の重みの評価について」『国立大学入学者選抜研究連絡協議会報告書』7:500-501.
- 山田文康・山村滋, 1997, 「大学入試制度変更の影響の分析-北海道大学法学部を事例として-」『日本教育工学会論文誌』21(1):37-45